

資料 1

模擬株式会社 IMAKANE FACTORY

～「社会に開かれた教育課程」と「協同学習」の活用～

1 模擬株式会社設立の主旨

生徒自らが社会で働くために必要な準備とは何かを考え気付くようになるためには、ほめられたり感謝されたりする機会を増やし、生徒の自己有能感が高まる場面設定が必要になります。そこで、社会で働く上で何が必要なのかを気付く機会として、校外での作業や現場実習を計画的に設定する必要があります。特に、校外で行う受注作業は、地域の関係機関の業務を補助する活動として、スタッフの一員に準ずる存在として作業の精度を上げることにより、関係機関の職員や市民から感謝されることが、生徒の自己肯定感や自己有能感を高めると考えられます。

生徒は福祉的就労も含め、組織が目指す目標や収益の向上に向かって努力することが求められることから、収益を上げることを意識した学習活動の枠組みを設定することが重要になります。

卒業後の職業生活への円滑な移行を図るため、卒業後の職業生活に類似した環境として、全生徒が一人500円の出資金をPTAから受けて模擬株主及び社員となって、「模擬株式会社 IMAKANE FACTORY」を設立しました。模擬株式会社では作業学習や受注作業、販売等について、「会社の仕事」として業務を行うとともに、仕入や商品管理、販売・会計のプロセスを体験する学習を行います。

2 模擬株式会社設立総会

平成29年6月7日（水）に、模擬株式会社設立総会が全校生徒参加の下、行われました。はじめに、総務部担当教員が生徒に株式会社設立の目的と定款、組織図、学習計画、予算などについて説明しました。

次いで、各学科の代表生徒がそれぞれの学科の特色や取り組みについて説明し、今年度の計画を決定しました。



模擬株式会社設立総会



窯業科・産業科の取り組みの説明

3 模擬株式会社における窯業製品の生産の工夫～「協同学習」を活用して～

3年産業科では、総会後に改めて株式会社とはどのように成り立っているのか、仕事やお金はどのように生まれるのかを説明する授業を行い、それを実感できるよう、その後の作業学習では、作業の目的や作業グループ、作業担当者氏名や作業分担、作業の流れなどを示す「組織図」を用いて作業学習を進めました。

(1) キーマカレー用の楕円皿の受注と生産

NHK室蘭放送局内のカフェから、キーマカレーやホットサンド用の楕円皿の製作を受注しました。カフェの運営を委託された鶴羽佳子氏（北海道教育委員会教育委員）が、キーマカレーのプロデュースを料理家の黄川田としえ氏に依頼し、使用する皿も探すことになりました。黄川田氏が打合せの際に、鶴羽氏が持っていた本校生徒の作品の方がいいという結論になり、受注が実現しました。

本校では、平成27年度から「アクティブ・ラーニング」の一つである「協同学習」について全校研究で取り組んでおり、普段の作業学習の授業においても「協同学習」の方法で話し合い、課題解決する授業を展開しています。

今回の受注生産でも、受注品の生産方法を話し合っ、「組織図」を活用してお皿の担当や商品チェック係を決めたり、報告する際の連絡系統を話し合っ決めたりしながら製品生産を進めました。

生産に当たっては、カフェから提示いただいた料理の盛り付け写真を参考にしながら、次の点に注意を払って試作を繰り返しました。

- ① 楕円皿の用途を考え、お客様が望んでいるお皿の形になるように、粘土の厚さと形がきれいになるための乾燥の方法について条件を変えて試作しました。
- ② 製品を製作する日が変わっても一定の品質を保つために、各製品を作るに当たって必要な知識を確実に学ぶことや複数のチェック係による検品、作った全ての製品の数と納品できる数などを把握するための商品管理を行いました。

その結果、「お客様に満足していただける商品」を全員が意識しながら各担当が責任を持ち、確実な仕事をすることができました。また、よりよい仕事をするためにPDCAサイクルで作業を進めることの大切さを生徒に実感させながら授業を進めることができました。



製作した楕円皿

(2) 飲食店用の大皿の受注と生産

2回目の受注作業として、町内にある飲食店やその関係店（札幌市内）から大皿の製作を受注しました。

「組織図」を利用して、各生徒の仕事の分担を明確にするとともに、1回目の受注品を納品するまでの過程でよかった点や改善点を話し合った結果に基づいて、人数配置の改善をしたり、製品の精度を上げるためにダブルチェックできる体制にしたりするなどの改善を行って、受注品の製作に取り組みました。

「組織図」は、作業の目的や作業グループ、作業担当者氏名や作業分担、作業の流れなどを分かりやすく示した構造図です。例えば、生徒を「釉薬がけ」担当者と「修正」担当者に分けて、前者は「組織図」の上方に、後者は下方に氏名札を配置し、作業分担と担当者氏名、作業の流れなどが分かるように、項目と項目を線で結びます。

この「組織図」を示して作業の目的や流れの理解を促し、生徒全員が「お客様に満足してもらえる製品を作る。」という共通の目的のために作業に参加し、お客様を想

像しながら、社会の中で働くという意識を持てるようにしています。

作業学習では、「協同学習」の考え方で授業を展開し、「個々に与えられた責任を果たすことで全体の仕事が成り立っていること」、「自分の仕事が終わったとしても、全体の目標が達成されていなければ仕事は完成していないからこそ、周りのために動かなければいけない。」という協働の考え方が身につくように取り組みました。



製作した大皿

4 模擬株式会社における窯業製品の生産の成果

よりよい製品を生産することができる「よい仕事」をするために、PDCAサイクルを生徒に実感させながら授業を進めることができました。

成果としては、次の点が挙げられます。

(1) 生徒の生産に対する考え方の変容

「自分の目標の達成や成長のために努力した結果、お客様のためになる。」という考え方から、「お客様のことを考えた上で、組織の中で自分はどのような役割を担わなければいけないのか。」という考え方に変化してきました。

(2) 正確でより深い知識や技術の習得意欲の向上

今までに比べ、知識や技術を習得しようという意識が高まり、自分が得た知識を作業ノートにまとめ直したり、授業以外の時間に技術面のアドバイスを教師に聞きに行ったりする場面が多く見られるようになりました。

(3) 障がいの自己理解と長所を生かした責任ある業務遂行の意識化・行動化

「組織図」や「〇〇担当」など、自分の働きが会社にもどのように貢献できるかを実感できるようになってきたことにより、「自分の障がい特性を理解して、手立てを考

えること」や、「長所をどのように生かすか」など、責任を持って取り組むために自分ができることを試行錯誤するようになってきました。

(4) チームとしての人間関係の深まり

学科の一員という意識から、「自分は会社の一員である。」という考え方ができるようになってきたことにより、学級の仲間意識が強くなり、「チームで仕事をする。」「チームで活動する。」というチームワークの意識が高まってきました。

今後も、卒業後が本番ではなく、「既に社会人である。」という意識を持ち、成長に向けて毎日を過ごすことができるよう、指導者としても試行錯誤していきたい。

(3年産業科担任 鐘ヶ江 真知)